

||||||| 雑 録 |||||||

アメリカのなかの中国

藤 原 貞 雄

学術研究誌として伝統のある本誌に載せていただくのはいささかのためらいもあるのだが、紙面を与えられたことを恵みとして、私としては大旅行であったアメリカでの生活のあれこれを記憶の鮮かなうちに記録しておきたい。

これは全くの雑録で、海外出張報告といった類のものではないから、本誌のまじめな読者にはそのつもりで捨て目をくれていただただけでけっこうである。

※ ※ ※

羽田をとびたつまでがたいへん

海外出張を考えた頃は、Hou, chi-ming, *Foreign Investment and Economic Development in China 1840-1937*, 1965, Harvard Unive. Press の翻訳がかなり進んでおり、彼がアメリカで使った中国近代経済史資料など一度見てもみたいし、また精力的な活動を続けているR.バーノン教授（ハーバード・ビジネススクール）や、大学院時代に翻訳に苦勞させられたA. I. プルームフィールド教授（ペンシルヴァニア大学）にも会ってみたいという漠然としたものだった。申請した頃には翻訳は完成していたが、長い伝統と厚い研究の蓄積をもつ日本では、出版の必要もなからうという気になっており、資料蒐集の熱意もかつてほどではなくなっていた。申請したのも、いわば成り行きのようなもので、時期をはずせば、海外に出かけるなど億劫になるのは分りきっていたからというより他はない。

申請は認められたものの、いっこうにその気にはなれず、ようやく周章てだしたのは庶務係長から親切な、手続きの督促があったり、今更お金の必要なことに気がついてからであった。生まれて初めて英文の手紙を書いた（紹聘状をもらうため）のが暮のことで、泥縄式の英会話に熱をいれはじめたのもそのころからのことだった。

何よりも力をいれたのは安く行って帰ることだった。学部に出していただけるのは往復旅費だけだから旅費を削り滞在費にまわすことが先決だった。風聞の如く安い切符はあるもので、交通公社の見積りの2分の1で大阪の某旅行社から羽田—ロスアンジェルス間の往復オープンチケットを手にいれたのが出発の2週間前。1ヶ月の旅行にはこれ位の大きさが必要ですなどという宣伝文句を鵜呑みにして車付きの最大級の旅行ケースを過度に清潔好きな女房が詰め込んだ下着フルセット10着分、替えスーツ、バスタオル、パジャマ、チリ紙1枚、ハンケチ10枚、頭痛薬、風邪薬、バンソウコウ—これらはほとんど使用しなかったものばかり—などでふくらませて山口を出発したのが3月23日早朝のことだった。

ふりかえればニューヨークは懐しい街

(1)

PANAM のジャンボ B 747 が離陸したのは予定時刻を5時間近くも遅れていた。これでロス・ニューヨークの予定の接続便は間に合わなくなった。ロスの PANAM の係員は自社の接続便を利用することをすすめたが、うっかり「イエス」などといえば真夜中にケネディ国際空港に降ろされてしまうので、旅行社の指示にしたがって TWA の深夜便に乗り継ぎたいと主張した。夕なずむロス空港のキャプテリアで時間待ちの間、はじめて旅情らしきものを感じた。

翌朝午前6時すぎ、強風のケネディ空港から8番街と9番街との中間、西34丁目に面した宿舎の YMCA のスローンハウスには相乗りの白タクが送ってくれた。

第29回アジア学会 (Association For Asian Studies, 略称 A. A. S.) は3月25日から27日までウォールドフ・アストリア・ホテルで開催された。アジア学会は国際学会で日本人会員もいる。私は会員でもなんでもない。たまたま旅行の間に開かれるのを知らされたので参加しただけのことである。名前のとおりアジア研究者の学会であるから、研究対象がアジアにあることだけが共通項で、その研究領域は千差万別である。だから「アジアにおける革命的な社会：発展戦略の比較」の分科会もあれば同じ時間に「インドの叙情詩：構造と感応」の分科会ももたれているというあんばいで、3日間になんと61の分科会が開かれている。

私は「中華人民共和国の指導力と政策の分析モデル」なる分科会と「アジア研究者の失業：アッフアマティブ・アクションとこの分野の将来」の分科会を傍聴した。もちろん私の英語力では報告や質疑は概要しか理解できなかった。この2つの分科会は盛況で、いろいろな意味で興味深かった。前者は報告も、その評価についても

立場が主に2つに分かれ、かなり激しい応酬がおこなわれていた。その中心は中国人および中国系アメリカ人であった。在ニューヨークの中国代表部からも参加者があり、特別に発言をもとめていた。後者は女性の参加者が多いのが印象的だった。報告も質疑も女性がより熱心だった。日本でも「博士浪人」がマスコミで問題とされるまでになっているが、アメリカではこの問題は以前から深刻である。特にアジアにおけるアメリカの影響力の衰退、アジアからの「撤退」政策にともない、また不況の長期化も相乗的に作用して、全米の大学のアジアに関する講座の閉鎖が進行し、新しい採用どころか、契約期間の終了と共に若手、中堅の研究者がどんどん放り出されているのがアジア研究の現状のようである。アッフアマティブ・アクション (affirmative action) とは、後に調べてみたら女性や少数者 (外国人—特に白人以外の—や、黒人、アメリカ先住民) の社会的権利の促進計画をさすらしい。権利はすでに法的に確認されている——たとえば企業や官庁に黒人や女性の採用を義務づけるなど——にもかかわらず、実際にはあまり実現していない。したがってその権利を認めさせ促進する行動が必要というのである。女性研究者が差別的にとりあつかわれているのは日本と同様で、スタンフォード大学フーバー図書館のモフィット夫人は、大学の教員の採用候補者に女性研究者は必ず入っている——その義務があるので——が採用される例はめったにないと説明していた。

(2)

アメリカの宿泊施設の料金の高低は設備の良し悪しよりも危険からの安全度に比例すると考えた方がよい。おこるかもしれない危険を気にしなければ、ニューヨークで最も安くて便利な宿はYMCAである。私が予約したスローンハウスは最古の歴史をほこり部屋数は1400以上もある。一人部屋は一泊8ドルにすぎない。泊り客はわずかの白人の老人を除けばほとんどが黒人である。(アフリカ系、ラテン・カリブ海系などあらゆる黒色系有色人種を便宜的に黒人と総称しておく。東南アジア、中国、朝鮮、日本などの黄色系人種をアジア人、それ以外を白人としておく。白人というよりも紅人という方がふさわしくても白人である。) 地方からの観光客なのか、職を求めてニューヨークにやって来ているのか区別はつかないが、とにかく日本の旅館などの雰囲気とはまるで異なるのはたしかである。館内での盗難などについては一切当館は関知しない旨のはり紙がいたる所に掲示してあり、これまた黒人の若いガードマン数人が空手の真似などしながらホールでふざけている。いかにも、ピカピカの旅行カバンをさげて、ネクタイをしめ、お金をもっていそうなアジア人はここの雰囲気になじまない。

このような雰囲気の宿から、厚い深紅の絨緞が敷きつめられ、豪華なシャンデリアや調度に囲まれた学会会場まで朝夕歩いて二日間通った。会場には黒人の姿は見受けられない。どちらもニューヨークなのである。富と貧しさがこれほど画然と感じとれる街を私は知らない。ここはあらゆる点で資本主義の頂点を示している。だからニューヨークの街は危険であり、衰微的で、刺激的であり、快樂的であり、しかも都会に住んだことのある人間になら、ある意味で懐しさを感じさせる街なのである。といっても私が実際に体験したのは朝のブロードウェイ、子供たちで賑わっているエンパイア・ステート・ビル、ずいぶん歩いたつもりだが半分にも達していなかったセントラル・パーク、美術工芸品のスーパーマーケットたるメトロポリタン美術館などを挙げうるぐらいのもので、そういえば子供に屋上に登って来ることを頼まれていたワールド・トレード・センタービル——最新のキング・コングが登ってベトナム戦で開発されたヘリコプターに射ち落とされた——には行けなかった。

東海岸は汽車が一番

(1)

ニューヨークからフィラデルフィアまで特急——ほんとうは急行というのが正しいのかも知れない、阿川弘之なら知っているだろうが——で約1時45分である。料金は8ドル25セント。料金を尋ねたら80ドル25セントに聞こえたので慌てて100ドルのチェックに出し直したら、沢山のおつりがきて、ほっとしたり、聴解力にいまさら不安になったりした。アメリカの鉄道は全く気儘である。何番ホームに入るのか案内係に尋ねても定刻——めったに定刻には来ないらしい——の15分前にアナウンスするからそれを聞けというだけである。ホームが決まっている国鉄に慣れた日本人にとっては不安だが、乗ってしまえば国鉄よりずっと安くて快適である。頻繁な車内販売に悩まされることもなく、ゆっくり落着いて窓の外を楽しむことができる。普通席の快適さは国鉄のグリーン席以上だし、車掌は愛想は良くないまでも親切である。

(2)

A. I. ブルームフィールド教授は、1914年カナダのモントリオールで生まれ、今年、63歳である。多作な方ではないが、その確実な仕事ぶりは日本でも早くから関心を集めていた。1974年には中西市郎、岩野茂道の両教授の監訳で *Capital Imports and the American Balance of payments, 1934-39*, が『国際短期資本移動論』として

新評論社から出版され、1975年には彼の秀れた3つのモノグラフが『金本位制と国際金融』（日本評論社）として小野一一郎、小林龍馬教授の手によって翻訳され、広く知られるようになった。

ブルームフィールド教授は街の中心にある瀟洒なアパートメントに独りで住んでいる。教授の態度は気さくで、私の緊張を解くには十分であった。教授との食事はいつも愉快だった。若いウェイトレスの腰が教授の脇にあたると“Oh, sorry.”, “no, no, very good touch”などと冗談をいったり、お別れのディナーの折には、中年の魅力的なウェイトレスと仲良くなり、彼女の現在の夫が3度目などを聞きだして得意気であった。アルコールの後で平然と車を運転するので心配すると“never mind, I know how to drink”などという。

教授の仕事の日本での翻訳がいずれもマルクス経済学者の手でなされたことは教授にとっては何としても腑に落ちないことであるらしい。どうして彼の仕事がマルキストの関心をひくのか理由をきかれたので、教授が国際的にも徹底的に資料、文献の渉猟——教授は長い間、ニューヨーク連銀等の実務上の責任あるポストにいたのでこうしたことが可能であった——をおこない、確実な事実を追求し推論を下す研究がマルクス経済学者の好感を呼ぶのだと答えたが、納得したようにはみえなかった。おそらく、教授もマルクス主義に対するアメリカにおける頑陋な観念から自由ではなかったからかも知れない。教授の現在の興味は国際経済に関する経済思想史にあるとのことで、いただいた抜刷りには *Developments in International Economics* (in S. Weintraub, ed., *Modern Economic Thought*, 1976) とあった。

(3)

フィラデルフィアからワシントンD.C. までは汽車で2時間少々である。料金は11ドル。フィラデルフィアは東海岸の途中駅だから、やはり定刻に汽車は来なかった。ワシントンはアメリカの首都だから余程立派なホームを予想していたら汚なくて小さなホームだった。時刻表と停車駅とを照らし合わせていたから間違いのないと思ったが近くの客に「ここがワシントンか？」と尋ねたら、何と「知らない」と返答されたのには降りるに降りられず困った。少し離れた客が親切に教えてくれなかったら、きっと立派なホームを備えた駅が現われるまで乗りこしていたにちがいない。全般にアメリカの鉄道は駅の建物は過去の栄光の遺産で立派だが、ホームは利用者が少ないために貧相で淋しい。

ワシントンは当初の予定にはなかったが、スローンハウスで貴賓室——といっても1泊16ドルにすぎないが——に相部屋をすすめいただいた彭沢周教授（大阪外

大)から、A. A. S.に参加していた Center For Chinese Research Materials の、P. K. Yu (余秉権)主任を紹介され、余主任がぜひワシントンに來いというので脚をのばしたわけである。

同センターはニューハンプシャー通りに小さな事務所をもっており、少数の職員で運営されている。名前のとおり、主として中国関係資料の蒐集、復刻、出版事業をおこなっている。最近では「紅衛兵資料」(全20巻)を出版したことで知られている。フォード財団などの資金も注がれているようであるが、経営はかなり難しそうであった。所員の Chi, ping-feng (元冰峯)博士(『清末革命与君憲的論争』1966年、中央研究院近代史研究所の著者)と長時間話し合う機会があったが、私の理解するところでは、アメリカにおける中国研究は、文化大革命と1971年のいわゆる米中接近で大きな変化をとげたらしい。とりわけ米中接近は在米中国人研究者の社会的な位置と意識に大きな変動をひきおこした。なぜなら在米中国人研究者は香港および台港の出身——特に若い層——が圧倒的であり、大陸出身者も中国の解放過程でアメリカに逃れた人たちであるから、中国に対しては親密な態度はとれなかったし、それはアメリカ政府の政策とパラレルであるがゆえに彼らの地位と意識の安定をもたらしていたのである。しかし、政府の対中国政策の変化と共に彼らの地位と意識も変化を余儀なくされている。特に若い研究者はこの変化を研究の選択幅の増大と受けとり歓迎している。しかし古い層は彼らの地位の低下を悩んでいるようである。余主任や元冰峯博士がそのどちらに入るのか私には判断することができなかった。ただ彼らがこの変動を中国研究に資料を提供するという役割に徹することでアメリカをしぶとく生き抜こうとしていることだけは痛い程理解できた。

ボストンはリスの遊ぶ安宿

外国で道を尋ねたら、いつも「正しい道」を数えてくれるとは限らないと覚悟しておくべきである。ワシントンではおよそ同じところで5人に宿までの道(乗るべきバスを含めて)を尋ねたら全部が全部に異なる方法を教えられ、危うく迷い子になるところだった。間違っていないなくても正しい——外国人にとっても分かるという意味でも——とは限らないし、まるで間違っていることもある。後で考えても5人のうち3人は完全に間違っていた。

ボストンでもそうであった。地下鉄の改札の職員が教えてくれた道は降りる駅まで間違っており、おかげで重い旅行カバンを下げ急な階段を上り下りして大汗をかいた。こんなボストン入りだったが、ケンブリッジは素晴らしく、予定を変えて2

週間も滞在することになった。

(1)

ボストンはニュー・イングランドの中心にある良港であり、ケンブリッジの街は港からも近い。独立戦争の当時、ハーバード・カレッジはこの街の一隅を占めていた。200年以上の歴史をもつこの大学は色濃いイギリス的な雰囲気の中にある。

宿のホリデイ・インの部屋に到着くと間もなく電話が鳴った。ハーバード・イエンチン図書館の Engene Wu (呉文津) 館長からで、歓迎の昼食を用意しているということであった。余主任が連絡してくれたらしい。

イエンチン図書館は親しみやすい雰囲気 of 優雅な建物に納まっている。玄関を入ると右側にイエンチン研究所のいくつかの部屋が並んでおり、左側に図書館がある。明るいガラス戸を押して入ると、受付と閲覧カウンターがあり、その奥に武骨で大柄なテーブルと椅子が整然と配列してある閲覧室がある。書庫は地下1階と地上2階の3層になっており、それぞれの層は使われている言語(朝鮮語、中国語、日本語、英語その他)で区別されている。大きな図書館ではないが使いやすい図書館である。アメリカでの中国、東アジア研究には欠かせない図書館で中文文献ではアメリカ国会図書館に次ぐ蔵書を擁している*。

職員も有能で魅力的な人たちがばかりであった。ウー館長は中国近代史が専門である。副館長の Lai, Yung-hsiang (頼永祥) さんや日本部門の責任者の青木利行さん、朝鮮部門の責任者の金聖河さん、閲覧部門の責任者の G. Potter さんにはいろいろと教えていただくことが多かった。それにいつもはにかみを含んだ笑顔で迎えてくれた受付の何謙さんを忘れることはできない。彼女の姿が見えないと淋しくさえ感じたものだ。

(2)

ホリデイ・インは大衆的なチェーン・ホテルだが私にとっては1泊27ドル(税金、チップを含めれば30ドル近くなる)は高すぎる。ポッターさんに相談すると図書館のすぐ近くにあるカーランド・インを紹介してくれた。ここはいわば下宿屋とでもいえばよからうか、大家さんである老夫妻は150メートルばかり離れたところに住んでいる。最初は1泊15ドルの部屋を借りたが滞在の延長を決めてからは10ドルの小部屋に移った。20以上も部屋のある古いイングランド風の3階建ての木造の建物にはたいてい私をいれて2、3人しか泊っていなかった。うす暗い階段をきまして部屋に辿り着くのは慣れるまでは気持ちが悪かった。共同浴室のシャワーは熱い湯が出るまで10分もかかり、お湯の出ない日もあったが、たいして気にもか

からなくなっていた。

夕食をとってからまた書庫にもぐり込んで9時すぎに部屋に帰るのが普通だった。それから近くのスーパーマーケットで買いこんでおいた罐ビールやワイン、オレンジ、チーズ、クッキーを気ままに口に運びながら1日の整理をするのは最高の過ごし方だった。クッキーを窓の縁に置いておくと、夜があけるとリスがやってきて無心に食べていた。時に忘れていると催促するようにいつまでもカサコソと窓の縁を行ききした。氷の張る朝もあった。強い風をくぐり抜けて図書館の隣の建物(W. ジェームズ・ホール)に入り、キャフテリアでコーヒーとトーストをつめこんで図書館に通った。

書店はさすがに多い。しかし興味をひく本は多くはなかった。あっても持ち歩くめんどうを考えると買う気になれない。せいぜいメモをしておいて日本で発注する方が便利である。ただアメリカでは書籍は再販価格制ではないので、売れない本は猛烈な割引がされている。意外とこういう本の中に掘り出し物が多いのではなかろうか。私はイラストや写真の豊富なブルーメンベルグの『マルクス伝』の英訳版 (*Portrait of Marx: an illustrated biography*) を1ドル——おみやげにさしあげた人には内緒にしておきたいのだが——で手に入れた。本屋をひやかし、こっそりしたアイスクリームをこぼさないように舐めながら夜道を宿に帰る時などは全く解放された自由人(?) だった。

(3)

イエンチン図書館は人文科学に強く社会科学はそれ程でもないと言われている。蔵書の比重から言えばその通りである。私は中文の経済学、社会科学(政治を除く)の蔵書のなかから、対中国外国投資に関係のありそうなものを捜すために、書庫を遊べた。ライさんの大把握な計算では中文の経済関係図書(分類番号4300~4599)は約2,900タイトル(冊数は当然これより多い)とのことであるが、単行書では解放前(30年代後半から1940年代)の当時の国民党政府の統計類が目につく程度で、むしろこの時期の種々の雑誌論文に関心のあるものが多かった。和書には、見るべきものは多くはない。ただこの機会に『満鉄資料彙報』や『満鉄調査月報』等を丹念に目を通すことができたのは望外の成果だった。私は当時の帝国主義諸国の対中国投資の推計を行なうという試みを続けているが、この点では今後、新たな資料を得ることで大きな進展を図るということはかなり困難ではないかという感じをもった(ありうるとしたら中国国内でそうした努力がされる場合であろうと思う)。むしろ既存資料の整理、修正、加工を通してより史実に近づくとする方法しか残されて

いないのではないかと思う。

(4)

R・ヴァーノン教授は1965年以来続いているハーバード大学の多国籍企業研究プロジェクトの指導者として夙に有名である。教授との会話は一時間にも足りないものであったが、その間じゅう教授に似た人に過去会ったことがあるという感じが離れなかった。後でよく考えれば大学院時代にゼミナールに出席させて貰った堀江英一教授の印象がそれであった。他人に警戒心を抱かせない人懐っこさと、理論的には他人を容赦しない厳格さと、真摯に他人の意見を求める謙虚さが一身に同居しており、知らず知らずに議論に引き込まれるという感じであった。この時ほど、自分の主張を十分に表現できない英語力の欠如を口惜しく思ったことはなかった。教授によれば先のプロジェクトは現在も継続しており、資料はコンピュータナイズされて蓄積しているとのことであった。海外投資に関して、日本政府の資料はよくなったという意見は意外だった。プロダクト・サイクル論の批判について意見を求めたところ、プロダクト・サイクル理論の普遍化のための作業をしているとのことであった。小島清教授の主張——いわゆる「アメリカ」型と「日本型」の国際投資——についての意見を求めたところ、「小島教授の理論は、アメリカの投資はバッドで、日本のはグッドというイデオロギッシュなものだ」ときわめて否定的であった。また教授は日本の海外投資については商社の果している機能に十分に留意すべきということを繰返し主張した。

当初は経営大学院を訪問し、多国籍企業研究の実情や雰囲気確かめて来たかったのであるが、イエンチンでの穴蔵暮らしに時間を取られ、アポイントメントを得るのが遅れ不可能となった。この点はいえすがえすも残念だった。

(5)

G・ポッター夫妻のことは忘れられない。ポッター夫人は1934年から45年まで山口高商でドイツ語の教鞭をとっていたWerner Preibisch教授(その墓碑は山口市本町1-2-15長寿寺にある)の姪にあたり、戦前8年間市内糸米町に住んでいた。当時、ハーバード大学を卒業して旧制福岡高校で英語の教師をしていたポッター氏と恋仲——かなり熱烈な——となり結婚した。ポッター氏は英、独、仏、露、中、日の6ヶ国語が完全にでき、大きな体で一日中、館内を忙しそうに飛び回っている。眼が会うとニコリとほほえんでは忙しげに姿を消す。たいへん短気だそうだが、なぜか日本語を話す時だけは悠長になるそうだ。思うに、英語の話せない日本の高校生

を長い間相手にしていたからにちがいない。

ポッター夫人は小柄なドイツ人で、夫妻とも日本語には不自由しない。戦前の山口での生活の思い出話は尽きなかった。招待された昼食では手製のパンに手製のチーズやジャムが添えられた。萩焼の花瓶に生けられた名も知らぬ花を眺め、萩焼の湯呑みでお茶を飲んでいると、ケンブリッジに居ることさえ忘れた。最後の晩は、5ポンドもある大きなロブスター2匹を茹で上げ、娘さんのケンさん、ポンさん——ちなみに長男はジャンという名前だそうだが、いずれもどう綴るのかは聞き忘れた——と共に盛大な別れの宴を催していただいた。

翌朝、AA機でサンフランシスコに向った。2週間の間にボストンは氷の張らぬ程度の暖かさに変っていた。

歩くのに疲れたスタンフォード大学

(1)

サンフランシスコ空港には V.I.A. (Volunteer in Asia) の、マット君が迎えに来てくれていた。もちろん初対面である。

彼の車でスタンフォードは空港から30分かかった。やく40キロメートルほどの距離であろうか。行きかう外車はさすがに日本製が多い。東海岸では欧州小型車がはばをきかせていたが、ここでは見なれた車が我が物顔に走っている。

カルフォルニアの歴史がそうであるように、スタンフォード大学の建物は南欧風である。その雰囲気はハーバードのそれと全く対照的である。いかにも若々しい富裕なアメリカを代表した感じがある。キャンパスはやたらと広い。学生は、たいてい本やノートをいれた軽いリュックを背負って、軽快車をとばしている。歩いていたのでは次の授業に間に合わない。私は宿舎のインターナショナル・センターから毎日、目的地であるフーバー研究所図書館まで歩いたが、十分にまわりの景色を眺める時間があった。いくら喉が欲してもとうていキャンパスの外までアルコールを得に行こうという気にはなれなかった。ここでは自転車が足であり、カルフォルニアでは自動車が足である。

(2)

フーバー図書館はその正式の名称を戦争、革命および平和に関するフーバー研究所図書館といい、第1次大戦後の1919年に H. Hoover の基金によって設立された。私の訪れたのはその東アジア部門 (East Asia Collection) である。イエンチン図書館が人文科学に強いのに対し、フーバー図書館はその名称からも推し量れるように社

会科学に強いといわれている。特に解放前の中国共産党に関する資料、解放後の中国についての資料は優れているといわれている。確かに、イエンチンと比較すれば経済関係資料が多いのは事実である。しかし、対中国投資関係資料については、つけ加えるべきものはさして多くはなかった。

スタンフォードにおける東アジア研究は斜陽化の過程にあるようである。もらった案内書には開館時間は月曜日および金曜日午前8時15分～午後5時15分、火、水、木曜日8時15分～10時、土曜日9時～5時、日曜日午後1時～6時とあるのに、実際には月曜日から金曜日まで午前8時半から午後5時まで開いているにすぎなかった。また複写設備も置いていない。その理由は利用者が少ないからということであった。閲覧室も人影はあまり見えないし、全体に図書館らしい静寂さはあっても活気に乏しい。その理由は私には分らなかった。ただはっきりしているのはカルフォルニア大学（バークレー）の中国、東アジア研究が盛んになって、今ではバークレーが中国研究の西のメッカになりつつあるらしいということである。研究が停滞すれば資料の質的量的発展も停滞する。この東アジア部門の資料の卓越した地位もバークレーにやがて譲るのかも知れない。

(3)

アメリカではガソリン1ガロン（=3.785リッター）が61～2セントから66～7セントの間である。セルフサービスのスタンドの方が安い。日本円に換算（1ドル=270円として）すれば1リッターあたり、43円から47円になる。アメリカ人の名目所得を日本の1.5倍とすれば、彼らは私たちの感覚でいえばリッター29円から33円程度で車を乗りまわしているのであり、カーター大統領が真刻な表情でエネルギー節約を国民に訴えてもあまり自動車に関する限り実効が上るようには思えない。フリーウェイは100 km/h以上ですっ飛ばす車で溢れている。

スタンフォードからロスアンジェルスにたつ日、たまたま図書館で面識を得ていたアメリカに着いたばかりのアジア研究所の小林弘二氏に、すぐそこだと教えられたサン・ホセ空港まで自動車で送ってもらうことになった。小林氏はカルフォルニアで自動車がないのは足がないのと同じだと脅されて日本を出発する実際にあわただしく自動車免許をとったが、指導員の添乗なしで運転したのはこちらに来て初めてだった（何と一週間もたっていない！）。正直に告白すれば、アメリカで生命の危険を感じたのは後にも先にも、空港までの助手席においてであった。V.I.A.の学生が車で送ってやるというのを断わったことを何度悔んだかわからない。慎重な小林氏は普通道路を走らせていたのだが、空港への道を尋ねる度に、親切な住民はなぜ、フ

リーウェイを行かないかと、フリーウェイへの入り口しか教えない。ままと入ったのが通りだった。あとは時速100キロの動く道路に乗ったも同じで、猛烈な勢いですぐ後をついてくる車をみればスピードをおとすのもままならず、瞬間的に通り過ぎる道路標識は右や左と指示するものの、車を縫いながら幾つもの車線を100キロのスピードで変更するのは慣れぬ身には神技に近く、あれよあれよという間に出口とおぼしき所を通り抜ける。結局2時間近くも走り続けて空港に着いたのは離陸10分前だった。生死を共にしていただいた御礼の言葉もろくろくに、チェック・カウンターを走りぬけ空に浮かび上がった。下界をみれば、今走ってきたらしいフリーウェイの車の列はおぼつかない小さな虫の群の如く、のろのろと動いていたが、やがてそれも遙かに見えなくなり、飛行機は南下を続けた。

※ ※ ※

ロスから小林氏に電話をかけると「いやー、全く胆が冷えましたなー。しかし、後で地図を見てみると、同じところをグルグル回っていたみたいですな。はっはっはっ」ということだった。お互いに無事で何よりでした。4月21日羽田着、全ての日程を終えた。(7月22日、稿)

*ハーバード・イエンチン図書館については拙稿「東アジア研究とハーバード・イエンチン図書館」(『アジアレビュー』1978年春季号、朝日新聞社)参照。